



サラサリアの夫婦の蜜月

ユメジダケ

男はサラサリア近郊に潜むしがない盗賊団の一人だった。

自分より力の強い頭目には卑しく媚びへつらい、その一方で新人や力の弱い下の者が相手だと途端に偉そうに威張るといふ典型的な器の小さい小悪党。日々盗みを働き、楽しみといえは酒と攫った女を抱くことくらい。

古今東西、物語においてそのような者がたどる末路は決まっている。

いつものように男が攫ってきた女を抱いていると、賊たちを束ねる頭目がにやついた笑みとともに帰ってきた。

「いつまでもヤツてんじやねえぞお前ら。デケエ仕事が見つかったんだからよ」

「へえ、どこぞのお貴族様でも襲うんですかいカシラ」

「へっ、そんなもんじやねえよ」

頭目は一息つき、自分を取り囲む手下を見まわしてから言った。

「新しいオアシスが見つかったんだよ」



その年は例年よりも雨季に降る雨量が少なく、国全体で水不足が懸念されていた。

そんな時に発見された新しいオアシス。

欲に塗れた盗賊共にとつては金塊の山と等しい。

その水があればどれだけ多くの命が救えるかなど考えるはずもなかった。

オアシスを占拠してその解放と引き換えに国に莫大な金銭を要求する。

普通に考えれば無謀であるものの、いくつかの要因が盗賊たちを動かした。ひとつは王国が内部の派閥争いで平常通りの武力を行使できないこと。もうひとつは盗賊団の規模がこれまでにないほどに膨れ上がっていたこと。

あるいは国内情勢を不安定化させ自分たちを盗賊という卑しい身分に落としたり国に対する復讐心というものもあつたのかもしれない。とかく現状であれば国が相手であろうと対抗できると踏んだ盗賊たちはオアシスを占拠するという暴挙を犯した。

オアシスはあまりにもあつさりとならず者共の手に落ちた。

貴重な水資源であるはずのオアシスに置かれていたのは申し訳程度の極僅かな部隊のみ。

その価値と戦力の釣り合わなさが国の疲弊を如実に表していた。

この分であればこれから奪還に差し向けられる軍の兵力も大したことないに違いな

い。

業を煮やした国が金を出すまで幾ばくもないだろう。

男たちは自分たちの勝利を確信し、浴びるほどの金銀財宝に囲まれる夢に浸っていた。

彼らが来るまでは――。



盗賊団が蹴散らされるのは、盗賊団がオアシスを占拠した時よりもさらにあつかなかつた。

彼らを捕らえたのは、来ると思っていた国の軍よりもさらに少ない数の僅か数名の

年若い男女。片手の数にも満たぬ彼らは、それでいて恐ろしいほどに強かった。国の軍隊であろうと相手にできる数を歯牙にもかけず、オアシスを占拠した盗賊のほとんどは捕らえられ、地下牢に繋がれることになった。

男も逃げおおせること叶わず、今は石でできた牢の天井を見上げながら、自分たちに下される罰について考えていた。

これまで自分たちが行ってきた所業を鑑みれば、死罪であってもおかしくはあるまい。

あの考えの浅いカシラに付いていったばかりに自分たちまでこんなザマだ。

少し前まで自分も金銭に目がくらみ、失敗した時のことなどまるで考えていなかったというのに、そのことは柵に上げて他人に責任を擦り付けることばかり考える。捕まったところで反省などしようはずもない。

男はどうしようもなく屑であった。

時刻は深夜を過ぎた頃。

同じ牢に入れられた仲間たちは戦いの疲労からとうに寝入っていたが、男だけは不思議と眠りにつくことができなかった。

僅かに地表に出た鉄格子の窓から入り込んだ月明かりが牢の床を青白く照らした。ちようどその時――。

「あの……」

「あん？」

牢の外から声が響いた。

「なんだあ……なんでガキがこんなところに……」

男が声の主に目を向けると、そこには暗くさびれた地下には場違いな身なりの良い赤毛の少年が立っていた。

こんな子供を地下牢に通すなど、衛兵は何をしているのだろうか。
男が疑問に思っていると、少年はおずおずと、だが勢いよく口を開いた。

「あのつ、なにか叶えてほしい願ひ事はありませんか？」
「は？ なにいつてやがる」

頭がイカれているのだろうか、この子供は。
罪人が繋がれた牢にやってきて開口一番に聞くことが願ひ事？
そんなことに一体何の意味があるのか。

答えてやる必要などなかった。
だが同時に、答えない理由も特になかった。

どうせ死罪になる身である。死ぬ前に叶えたい願望の一つや二つ口にしても良いだろう。

そんなやけっぱちの思考で男は願いについて考える。

願いは、もちろんある。

浴びるほど酒が飲みたい。

一生遊んで暮らせるほどの金が欲しい。

どれも願いといえるような小奇麗なものではなく、欲望といった方が相応しい薄汚いものだ。

だがやりたいこと、叶えたい欲望と言ったらたつた一つ。

「俺を捕まえてくれやがったあの金髪エルフを滅茶苦茶にハメ潰してやりてえ……」

自分たちを捕らえた連中の中にいた女のエルフ——。

陽光に輝く見事なブロンドの髪をたなびかせながら舞うように戦うその女の姿は、戦闘中であるにも関わらず思わず見惚れてしまうほどに美しかった。

サラサリアの民族衣装を身にまといはいたが、この辺りに住んでいる者ではあるまい。

ただでさえ砂漠地帯であるサラサリアに住むエルフの数は少なく、その中であれ程の美しさを持つていれば噂にならないはずがないからだ。

観光客か、いやあの所作振る舞いを見れば他国の騎士か貴族辺りか。

わざわざ他国の賊の征伐に赴くなど御苦労なことである。

さぞ御立派な正義感をお持ちなのだろう。

昏くドス黒い欲望が首をもたげる。

戦いの中でも見せていた白く美しい肌。

年若いながらも女性らしい曲線を描く豊かな膨らみに男たちが汚い欲望の目を向けていたことにあの女は気づいてはいまい。

穢れを知らぬその柔肌に無遠慮に手を這わせ、あの豊満な胸を揉みしだいてやりた
い。

男の剛直を女の性器に無理矢理突き立て、思う存分に蹂躪し、気が赴くまま男の精
を女の身体の奥底に注ぎ込んでやりたい。

あの女の持つ正義感や誇りを、歩んできた人生そのものを、すべて自分の欲望で穢
し尽くして、そしてその果てに快樂だけを求める雌に墮とすことができたなら――。

「？ サレンおねえちゃん、ですか？」

少年の言葉が、夢想到に浸っていた男を現実に引き戻した。

そう、すべては牢に繋がれた男の寂しい妄想に過ぎない。

陽の当たる道を行く彼女は、日陰にいる男とはこの先二度と関わることなどない。そしていつかはどこぞの優男と結ばれ幸せな人生を歩んでいくのだろう。まったくもってつまらないことだが、それが現実である。

「あの、ハメ潰すというのはどういう意味ですか？」

「……ちっ、お子様がよ。要は俺があの子を抱いて好き放題キモチよくなりてえって意味だよ」

「……サレンおねえちゃんと夫婦になりたいという意味ですか？」

「くそっ、もうそれで構わねえよ。ガキ相手にやってられっか、くだらねえ」

子供はしばらく逡巡するような仕草を見せたが、やがて何かを決意したかのように男を見ると口を開いた。

「……それがあなたの願いなんですか？」

「あ？ ああ。……いや、どうせならあの女に限らず世界中の女を好き放題できりやあいうことねえな」

「わかりました」



かくして物語は裏返る。

少年少女の愛と勇気の物語は終わりを告げ、代わりに始まるは男の欲望と女の嬌声が奏でる愛欲の夜想曲。



「あつ♥ あつ♥ そこつ、気持ちいつ♥ ああつ、素敵つ、旦那さまあ♥ あたしつ、

何が起こっているのかさっぱり分からなかったが、男は金髪のエルフ——サレンに手を引かれるまま牢を抜け出し、そのまま事前に取っておいたという宿に逃げ込んだ。逃亡する最中、なぜ自分を助けるのか聞いてみたが、サレンは不思議そうな顔をして「夫婦なんだから助け合うのは当たり前じゃない」などと言うばかり。

ひょっとしたらこの女は頭がおかしいのかもしれない。

そんなことを考えると、ふとあの赤髪の少年の姿が頭に浮かんだ。

『サレンおねえちゃんと夫婦になりたいという意味ですか？』

——偶然にしてはやや出来過ぎている。

あの少年とサレンにはなにかしら繋がりがあると考えてしかるべきだろう。

そう思った男は宿で率直にサレンにあの赤髪の子供について知っているかと尋ねた。サレンは男の質問に対して素直に答えた。

曰く、その少年はこの国に伝わる願いを叶えるランプの魔神である、と。

サレンは他国で見つかったランプをこの国に返すべくサラサリアを訪れたのだという。

眉唾物だ。

こんな話信じる方がどうかしてる。

サレンという少女が妄想の激しい頭のおかしい女だという方がよっぽど納得のいく話だ。

だが。

ジツと男は寝具の上に腰掛けるサレンの姿を見つめる。

露出の多い衣装から覗く白い肌。

走ったが故に紅潮し、いくつかの汗が雫となつてつるりと滴り落ちる。

決して届かぬと思つていた極上の美を持つ女が今そこにいる。

男の遠慮のない視線に晒された少女は、その顔に恥じらいの色を浮かべる。その顔に嫌悪の感情は、ない。

この状況を前に欲に塗れた男が、理性を保てるはずもなかった。

『なあサレン……俺たちは夫婦なんだよな？』

『ええ、そうよ』

『夫婦だったら、やることがあるよなあ……？』

そうして“夫婦”は初夜を迎えた。

初夜というにはあまりにも乱暴で、気遣いのない獣のようなセックス。

これまで男が抱いてきた女の誰もが足元にも及ばないほどの極上の雌。

本来ならば触れることも許されぬであろう相手を自分が穢しているという事実が、男の欲望を際限なく高めた。

肌に手を這わし、胸を揉みしだき、蜜穴を思う存分ペニスで擦り上げる。

妄想の中でしかできなかったそれらすべてが、現実として行われている。

『あつ、んう……奥つ、当たつて……お腹の奥つ、気持ちいつ……!! そこつ、もつと突いて、旦那さまあ!!』

サレンは最初こそ痛みに顔を歪ませていたが、拒むことをしない膣はすぐに愛する相手の剛直を受け入れるようになり、いつからか蜜液をよだれのように結合部から零

し、雌の悦びに満ちた声を上げるようになった。

元々快感を感じやすい体質なのかそれともこれも魔人の魔法の効果なのか。

理由はさておき、少女が乱れ喘ぐ様はさらに男の興奮を掻き立て、その晩男は日が昇るまでサレンの身体を貪り続けた。

そんな激しく熱い初夜から幾日か経ち――。

男とサレンはサラサリアから少し離れた町の宿にいた。

一盗賊である男の顔を覚えている者はほとんどいないが、いかんせんサレンという少女は目立ちすぎる。

国王のお膝元にいればすぐに見つかってしまい、サレンとともにいる男はまた牢に戻されることになるだろう。

一度知った快樂を手放すことなど、男にできるはずがなかった。

いや、欲深いこの男でなくても一度サレンという女を味わってしまった男がそれを手放すことができるだろうか。

「はあ……はあ……今日も素敵だったわ、旦那さま♥」

情交の熱が冷めやらぬ恍惚とした顔でサレンが男の顔を見つめる。

女の艶と色気が凄絶なまでに美しい表情だった。

表情だけではない。めくるめく女の快楽に身をやつし続けた少女の身体は男を虜にする魅惑の肉体へと変わりつつある。

豊満な胸は沈み込むように柔らかく男の指を迎え、膣肉は火傷しそうなほどに熱い愛液を垂らしながら男の逸物を締め付ける。

男を知った少女が、その脆い殻を捨て去り、オンナとして羽化しようとしている。そのきっかけになつたのが紛れもなく自分であるという事実。男は高揚を抑えるこ

とができない。

本来サレンと結ばれるはずであった男を押しつけ、自分というサレンからすれば路傍の石のような存在が、彼女の肉体と精神に消えぬ変化をもたらしたという事実には総身が震える。

「あつ……。ふつつ、また、んつ、中で大きくなってるわよ。まだ満足してないのね。まったく、節操がないんだから、あたしの旦那さまは♥」

あの魔神の魔法の効き目が弱いのか、それとも本人の意思が強いからなのか。

サレンは時折正気に戻るような仕草を見せる時があった。

だが、そんな時であっても「夫婦」という単語を強調すると大人しくなった。

おそらくあの魔神のかけた魔法があくまで男とサレンが夫婦であるという形だからであろう。

しかし、サレンが正気を見せるその頻度は日を追うごとに、男がサレンを抱くたびに少なくなってきた。

思うにサレンが元々持っていた魔法に抵抗する意思を、男が与える快樂が削り取っているのではないだろうか。

快樂に対する受容の高まりが、サレンという少女に残された最後の理性を覆い潰す一助となっているのかもしれない。

にやり、と男は笑みを浮かべる。

その様に男らしさを感じたのか、サレンはうつとりと頬を染めながら男の顔を見つめた。

魔神の魔法とやらだっぴつまで続くのか分からないのだ。

だがその効力が切れるまでに痴態に狂わせ続け、二度と抜け出すことができないほ

どの圧倒的な快楽でこの少女を染め抜くことができれば――。

このオンナは一生自分のモノだ。

いや、そうしてみせる。

完全に快楽に溺れたサレンの姿を夢想し、射精した後で柔らかくなっていた逸物が硬さを取り戻す。

もはや男の妄想という絵空事などではない。いずれ訪れる未来の想像だ。

目の前には再び始まる情事を期待し、情欲に満ちた濡れた瞳で男を見つめる。妻の姿。

妻の期待に応えるべく、夫は再び猛然と腰を振り始めた。

「ああああんっ、んっ、んっ、ふああああっ♥ いいっ、気持ちイイツ♥ 素敵っ♥
もっど、もっど激しくしてっ♥ もっどあたしを愛してっ♥ 滅茶苦茶にして!! 何
も思い出せなくしてえっ!! ああっ、旦那さまっ、あたしの旦那さまあっ!! ♥♥♥」

サラサリアの夫婦の蜜月

発行日 2023 年 12 月 3 日

著者 ユメジダケ

<https://www.pixiv.net/member.php?id=17058402>

Generated by pixiv

本書を無許可で複写・複製することは、禁じられています。
